【調査】 ソヴェート經濟統計の檢討

I 「二つの體制」と經濟統計の問題

——最近英米學界のソヴェート統計批判について——

I 文獻誌的概觀

ソヴェート經濟の發展，そのテンポ等については，今日にいたるまで，二つの意見が對立している。それに附隨して，經濟發展なり，經濟發展のテンポなりを具體的に，數量的に，指示するところのソヴェート經濟統計についても，ソ連邦當局の提示するものの，正しさ，信用度などについての論議が，今日にいたるまでそのあとをたたないのである。若干の著者は，ソヴェート經濟統計をまっこうから信じようとしない。1936 年に《Soviet Money and Finance》を書き，1938 年には《Soviet Trade and Distribution》を出し翌 1939 年には《The Economics of Soviet Agriculture》を世に問うたイギリスの著名なソ連研究家たる L. E. Hubbard がそれである。彼はその《Soviet Trade and Distribution》の終りに《Appendix》として《Soviet Statistics》なる一章を設けているが，その中で，「政府および黨の指導者や長官連の間では祕密にどんな統計が回覽されているかはしらないが，發表された諸統計は客觀的でもないし信頼できるものでもない。」[1]……「ソヴェート統計がほしいままに僞造されているということは斷言できない。しかし實際の狀況を餘りにも樂觀的に描き出すように提示されていることは明らかである。」[2] と言っている。

しかしながら，最近においては，ソヴェート經濟研究者達は，一般的に言って，少くともこの Hubbard 流の「二重帳簿」說や，數字の僞造という點には同意しない。たとえば，Hubbard をソヴェート統計の不信者の一人として引用した H.Schwartz の論文も，それを引用したあとで，この二重帳簿說は正しくないとはっきり言っている。[3] 又，合衆國の聯邦準備制度理事會の調査員 Alexander Gerschenkron は，ソヴェートの工業統計を論じた自分の論文の中で，「ロシア經濟のまじめな研究者達は，ロシアでは統計報告を僞造しようとするよりは寧ろ確かな統計報告を確保しようという努力がなされているということを，一致して認める。」と述べ[4] その際，一連のソヴェート研究者とその著書とをひきあいに出している。—Colin Clark, A Critique of Russian Statistics, London 1939, p. 46; Abram Bergson, The Structure of Soviet Wages (A Study in Socialist Economy), Cambridge, Mass., 1944, p. x.; Alexander Baykov, The Development of the Soviet Economic System, Cambridge, New York, 1946, p. XIV. われわれはこれにつけくわえて，Webb 夫妻の著書とさきにあげた H. Schwartz とをあげることができる——Sidney and Beatrice Webb, Soviet Communism, A New Civilization, Vol. II. 1937, p. 651; H. Schwartz, op. cit. —彼等はいずれも，大局においてソヴェート經濟統計が信頼すべきものであり，僞造されているものではないと主張する。その理由は，彼等自身の見聞・觀察，ないしは，事にふれての計算による檢證を除けば，第一に，ソ連邦の爲政者達は，彼等が國の內外に對して公表したと同じ數字をもとにして自分達の政策を決定して行くのであるから，數字を改作することは彼等自身の政策を誤まらしめることとなり，かえって彼等自身にとって不得策であるからであり (A. Bergson, S. and B. Webb, H. Schwartz)，第二に，もしそういうことが一般に行なわれるとすれば，1925—1932 年の農業生產の低下は修飾されて發表されたであろうが現實にそういうことがなかったのをみてもわかる (Colin Clark)。又，同一のあるいは異なった資料源泉の中に發見される矛盾した數字が統計的揑造 statistical fabrication の證據であると見られる場合が多いが「しかし，揑造された一組の資料はおそらくきわめて首尾一貫するようにできた筈だから，この考え方は正しくない。」合衆國の資料についてもこの種の矛盾は時として發見さ

1) Leonard E. Hubbard, Soviet Trade and Distribution, London 1938, p. 368.
2) L. E. Hubbard, op. cit. p. 369.
3) Harry Schwartz, On the Use of Soviet Statistics, *The Journal of the American Statistical Association*, Sept. 1947, Vol. 42, No. 239. 邦譯 大藏省理財局『調査月報』第 37 卷第 1 號 (昭和 23 年 1 月 25 日號)「ソヴェート統計の使用について」
4) Alexander Gerschenkron, The Soviet Indices of Industrial Production, *The Review of Economic Statistics*, Vol. 29, No. 4, Nov. 1947, p. 217.

れるのである（H. Schwartz），というような點である。そのような理由で，Bergson, Schwartz 等は「二重帳簿」《double bookkeeping》説を否定し，Webb 夫妻は「加工された數字」《cooked figure》なる rumour を否定する。しかしながら，これらの國外のソヴェート經濟研究者にとっては，ソヴェート統計が充分に滿足すべきものではない。H. Schwartz は，第一に，1931年，1936年と段階を劃しつつ少くなって行った公表統計の量が，1939年の戰爭勃發とともに「ほとんど完全に近い數字の燈火管制」《nearly complete blackout of figures》となって今日に續いていることをなげき，「ソヴェートの現狀についての判斷は，統計的性質をもつ報告に依存するかぎりは，きわめて注意深く，また，多くの保留附で，なされねばならないのである。」と注意し，第二に，「ソ連邦は統計學者および計算家の訓練された集團をつくりあげるために比較的僅かな時間しかもたなかった」ことと，「克服すべき自然的困難が大きい」ことと，「合衆國にくらべて虛僞の報告をおこなわせる樣な若干動因が存在する」こととによって，「ソヴェートの資料は一般的にアメリカの資料にくらべて誤差のマージンが大きい」ことを注意しているが，この最後の理由たる「虛僞の報告をおこなわせる樣な……動因」の存在は必ずしもそのままにはうけとりがたい。更に Schwartz は，集計對象の定義の變更，集計の際の標準の變更からくる誤まりや，計畫見積と實績との混同，第二次大戰後のソ連邦領域の擴大化からくる誤差などについて，煩をいとわず，實例をあげて說明し，最後に，國外の研究者がこのような種類の誤差を防止するための有力な手引きとして，ソ連發行の出版物をあげている。—— Центральное Статистическое Управление Госплана СССР, 《Словарь-Справочник по Социально-Экономической Статистике》, Госпланиздат, Москва 1944 г. ——この書物にはソ連邦における集計對象の定義・範圍，集計方法についての說明がのせられているという。[5] Bergson はソヴェート經濟の研究者はソヴェート經濟統計利用の際，その發表方法についての注意を怠らぬよう戒告し，民間の文獻よりは政府の統計局の數字によることをすすめ，Baykov は，一時的に統計資料が公表されず（たとえば，集團化の時期の農業關係の報告），また公表形式がしばしばかわるために，發展の長期傾向を示す統計諸表が作成されないことをこぼしており，Webb 夫妻は，完了年度の現實の數字と經過中の年度の見積數字との間に餘りにもひどい差があること，生產額の絕對量に不相應な非科學的な增加率があること，宣傳的な文書の中には一番都合のいい統計だけをとりだすくせがあること，の三つをあげ，しかしこれらは統計そのものの正確さを減ずるものではないと斷わっている。

最近にいたって，Harvard 大學の機關誌の一つである《The Review of Economic Statistics》はその 1948 年 11 月號（Vol. 29, No. 4）においてソヴェート經濟統計の吟味をおこなっている。このことは戰後におけるソヴェート研究の重要性が特にアメリカ合衆國において增大しつつあること[5] と考えあわせて興味深いものがある。該當文獻を以下に列擧することとする。

（1） Seymour E. Harris, Introduction.

（2） Colin Clark, Russian Income and Production Statistics.

（3） Alexander Gerschenkron, The Soviet Indices of Industrial Production.

（4） Paul A. Baran, National Income and Product of the U. S. S. R. in 1940.

（5） Abram Bergson, A Problem in Soviet Statistics.

（6） A. Yugow, Economic Statistics in the U. S. S. R.

以上の六つの文獻全體は一つの特集を成しており，《Appraisal of Russian Economic Statistics》と總題されている。これに對する批判は，同誌の1948年2月號（Vol. 30, No. 1）に《Further Appraisals of Russian Economic Statistics》の總題の下に，Maurice Dobb と Harry Schwartz とによってなされた。以下がそれである。

（7） Maurice Dobb, A Comment on Soviet Statistics.

（8） Harry Schwartz, A Critique of "Appraisals of Russian Economic Statistics."

これらの諸批判の內容に立ち入って論ずることが，この紹介の一つの主題であるが，それに先だって，まずこの前後に發表された若干のソヴェート經濟統計の批判論文をついでにあげておこう。以下がそれである。

（1） N. Jasny, Intricacies of Russian Income Indexes, *The Journal of Political Economy*, Aug. 1947. 邦譯，大藏省理財局『調査月報』37卷4號（昭和 23 年 3 月 5 日發行）「ソ連邦國民所得指數の複雜性」

（2） Harry Schwartz, On the Use of Soviet Statistics, *The Journal of the American Statistical Association*, Vol. 42, No. 239, Sept. 1947. 邦譯「ソ

5） Harry Schwartz, op. cit.

ヴェート統計の使用について」大藏省理財局『調査月報』第37卷第1號（昭和23年1月25日號）

（3） How Reliable Are Soviet Statistics?, *How Strong Is Soviet Russia*（A New Republic Special Section, New Republic, May 16, 1949, in 2 pts, pt. 2.）

以上が，最近のアメリカ學界を中心としたソヴェート經濟統計の吟味《Appraisal》の中，われわれの手にし得たものの全てである。尙，その他に，前記の《The Review of Economic Statistics》の Symposium の中で S. E. Harris は，Prof. Harry Schwartz の Russia's Postwar Economy, published by the Syracuse University Press, 1947. の參照をもとめている[6]が，これは私は未だ現物を見ていない。

以上のアメリカ文獻の中，さきの《The Review of Economic Statistics》Vol. 29, No. 4, Nov. 1947. については，それによったきわめて簡單な紹介が，『世界』および大藏省『調査月報』にのせられたことがある。—「ソ連の經濟統計」『世界』第30號（昭和23年6月號），—「ソ連邦の統計はほんとうか」大藏省理財局『調査月報』第37卷第1號（昭和23年1月25日發行）

以上の中，Gerschenkron については別稿「ソ連の生產指數」において，Clark, Baran, Jasny については，別稿「ソ連邦國民所得統計の吟味」において，その內容の紹介がなされている。それらを參照されたい。Bergson の批判は，これを一口に言えば，ソヴェートの勞賃・勞働統計について，集計對象の概念規定が不明確であるために，たとえば五ケ年計畫上の數字と中央統計局ЦСУ集計のものとの間にくいちがいがあることを指摘しているのである。勞賃・勞働統計については，それがソ連邦においていかにしてつくられるかについて充分なる知識と資料とがない限り，われわれはこれに對して，殆んど何ごとも言えない。Bergson 自身も，この樣な不一致の由って來る所については，斷言的にのべることは出來ない狀態に在る。Yugow の敍述は，主として，ソヴェートにおける國民經濟計畫化と統計との關係，ソヴェート統計制度の概要，などを與え，ここでは，他の論者の相當手きびしい批判とは趣を異にして，どちらかといえば，ソヴェート統計を肯定的に見ようとしている點が目立つ。

II 主要問題

（1） ソヴェート統計と資本主義諸國の統計

以上の如き，最近の，國外よりの統計批判の企圖に對して，ソヴェートの經濟學者あるいは統計專門家達はいかに答えるであろうか。殘念ながらわれわれは，かかる資料を知らない。したがって，それについては，われわれに何も語る資格はない。ただ，起り得べき反批判がいかなる線に沿ってなされるであろうか，ということについては若干の推測は可能である。以下に，それを摘記してみよう。

第一に言われるであろうことは，このようなソヴェート經濟統計の批判を，歷史的な流れの中においてみる時には，これらの批判が，窮極において，ソヴェート體制，ソヴェート經濟體制への批判・不信につながっており，それの一つの變種であるということである。ソヴェート體制，ソヴェート經濟體制に對する批判・不信の表明が1917年のソヴェート國家建國以來，外國の多くの經濟學者間のたえざる問題であったことは，周知の通りである。たとえば，第一次五ケ年計畫が發表された時，合衆國の經濟學者 Stuart Chase が《New York Times》の誌上で（Dec. 11, 1927）「われわれ人間には月世界への旅行の方がまだしも成功の見込があるようだ。」と批判したことは，當時のゴスプラン副議長ゲー・テー・グリンコ Г. Т. Гринко の著書の中に引用されて普く知られている。[7]

このような不信の感情は，資本主義の立場にたつ經濟學者である限り，彼等のソヴェート經濟に關する感情の底流としてぬきがたいものであろう。ただ，今，われわれの當面している問題は，このような感情が，ソヴェート經濟統計の經濟學的・統計論的・批判としてもちだされた點に始まる。そのような關連でながめる場合，ソヴェート側としては，問題となっている個々の統計の適否・正否はともかくとして，ソ連邦經濟統計全體と資本主義諸國の統計全體との體系的なつきあわせをまず要求するであろう。蓋し，この場合，諸統計の背後にある，國力，經濟力の測定，資本主義諸國のそれとの比較が問題となっているからである。二つの統計體系の比較は，單に統計技術的におこなわれるべきでなく，統計が社會經濟的發展の一つの指標である事が强調され，ソ連邦成立以後における，ソヴェート經濟をも含めた世界經濟の發展に關する，社會經濟的な，質的な，視角と併せて，それらの諸統計の提示する量的な分析が理解・吟味さるべきことが要求されるであろう。ところで，ソヴェート經濟學界におけるかかる視角は，周知の如く，いわゆる общий кризис капитализма ; Allgemeine Krise des Kapitalismus という考え方である。ソヴェート經濟學者達の多くは，この視角からすれば，生產力發展のテムポ，國民所得の增加率について，資本主義諸國とソ連邦のそれとを區

6） S. E. Harris, op. cit. p. 213.

7） G. T. Grinko, The Five-Years Plan of the Soviet Union, New York 1930, p. 15.

別する質的な相違がひき出されると說く。たとえば，B. Kauはソ連邦の國民所得に關するその著書[8]の中で言っている。——「資本主義發展の最近の段階の特徴は，周知のごとく，國民所得增大テンポの著しい低下である。」[9]「このテンポのうちに，資本主義とくらべてソヴェート經濟につきものの非常な優越性なるものが一般に現われている。だがテンポの量的優越性ということは，テンポそのものの新たな質，新たな物質的基礎におけるテンポの動きの他の表現たるにすぎない。」[10] したがって，ソヴェート側の考え方によれば，かかるテンポの根底にある社會經濟的な質の問題を，統計數字以外の經濟學的文獻によって讀みとらねばならない，ということになる。これでは，少くとも，統計そのものの吟味としては議論にならないであろう。又，この際ことわっておけば，Kauのこの論文はなにも國外からの統計批判への反批判でもなく，いわば手當りにとり出してソヴェート側の見解を示したにすぎない。だが，おそらく國外からのソ連經濟統計の批判論文が輸入された場合，ソ連邦の經濟學者達の多くが，右の批判を，自國の今後の統計活動のための有益なる示唆としてうけとるよりも前に，まず，上の如く反駁するであろうことは，容易に想像できるのであり，又，それは，ソヴェート的な考え方としては當然のことであり，一貫性をもったものである，と思う。[11]

このような考え方から，ソヴェートの經濟統計全體と資本主義諸國の經濟統計全體とをつきあわせるならば，現に存在するソヴェート經濟統計の不備の問題よりもさきに，資本主義諸國に存在し，ソヴェート連邦には存在しないところの諸統計，すなわち，失業統計，恐慌現象を特示する諸々の統計的指標，のごときは，それが存在するということによって，それ自ら，資本主義そのものの現段階における特質をえぐり出しているのではなかろうか。しかも，諸資本主義國における諸經濟統計がこれらの諸國の內部にある政治經濟的諸條件のために，統計學の立場からする學問的要求にそいがたい程度の歪曲を蒙っていることは，二つの統計體系の全體的な對決を問題とする場合，當然問題とされなければならないであろう。

これに反してソヴェート經濟統計については，二つの特長が，逆に指摘されるであろう。又，現に，前記の《The Review of Economic Statistics》, Nov. 1947 の Symposium の中でも，A. Yugow はその點についての指摘をおこなっているのである。[12] その第一は，ソヴェート統計には，資本主義諸國の統計と異なり，企業の祕密[13]，私的利害の混入，競爭と獨占との存在等々による Bias の介入することがない點であり，[14] 第二は，ソヴェート統計がソヴェート經濟の計畫的性質の故に，統計機構が行政管理機構と表裏一體の關係にあり，しかもこの兩機構が計畫化されている點である。このことはいわゆる價値法則の問題とも關連させて考えねばならぬ。價値が價格を通じて表現せられ，しかも價格のみが與えられている場合，かかる價格の表出を通じて，價値，すなわち經濟の實體的關係をつかむことは，經濟學の上において，また，經濟統計の正確さの吟味において，常に問題とされてきたことである。ソヴェート連邦においては，價値法則はいわゆる社會主義社會の完成とともに，著しく變容されてきている。これは，現在わが國の關係學界においてその意味について論爭中のことがらであるが，今ここに結論的に云えば，かかる價値法則の變容こそが，價値法則による Bias をソヴェート統計について縮少することになると主張される。これについては尙，異論が生じ得ると思う。問題の詳細な展開は後日にゆずる。

（2） いわゆる「過大評價」《upward bias》の有無，その意味

以上が，與えられた批判に對してソヴェート經濟學者から直ちに提出されると考えられる異論の中いわば總論部分に相當するものである。以下において，アメリカの諸學者から提出された論點の中，ソヴェート統計はソヴェート經濟の生產力，國民所得の發展テンポについて過大評價をおこない，それによってソヴェート經濟力，國力を不當に高く示しているという主張（これがアメリカ側の批判の主點である）について，その個々の事由をソヴェート連邦統計制度の發展とかかわらせて解說したいと思う。

1）「不變價格」の問題 第一は，ソヴェートの生產

8） В. Кац, Народный Доход СССР и его Распределение, Москва 1932. 邦譯滿鐵調查部『ソ連邦の國民所得』昭和 14 年 11 月

9） 邦譯 44 頁

10） 邦譯 61 頁

11） 但し，そのような自己批判が全然無いということは，誤りである。Bergson はソヴェート勞働統計を論じた前揭論文に，И. А. Кац のソヴェート統計に對する痛烈な批判の言葉を擧げている。——《According to Kats (За полны учёт Фондов заработной платы, 《Плановое Хозяйство》 1938 г., No. 7, стр. 66), who is the most openly critical, the shortcomings (of the Soviet economic statistics) reflect a style of work which "has nothing in common with the bolshevik struggle for a 'true figure', with the struggle against window dressing and outright wrecking in accounting."》 Bergson, op. cit., p. 238

12） Cf. A. Yugow, op. cit. p. 244.

13） 企業の祕密の問題についてはレーニンの詳しい敍述がある。—— Ленин, Сочинение, 2-ое изд., т. 21, стр. 155—192.

14） Cf. A. Yugow, op. cit., p. 244.

指數が 1926—7 年價格を不變價格として，各年次の當該年度價格 current prices をこれに換算している點である。ソヴェートの經濟統計書を開けば，生產に關する統計數字はすべて《В ценах 1926/27 г.》として表現されているが，この點をアメリカ側の諸學者が難じているのである。Hubbard の如きはこれを《hypothetical roubles》とまでいっている。[15] 今，これをかりに不變價格の問題となづける。この問題は別稿「ソ連の生產指數」において山田助教授によって論ぜられるところであるが，外國から論ぜられ得る難點を別として，ソヴェート側が 1926/27 年度價格を不變價格として設定した理由については，次のものがあげられるであろう。

（1） 1918—1920 年の內亂の影響，1923 年のいわゆる「鋏恐慌」《Scissors Crisis》の影響が，充分に清算され，1924 年の幣制改革の效果が現われ，それと同時に，いわゆる復興期が完了して(1925 年)，ソヴェート經濟の戰時的荒廢狀態が清算された時といえば，1926—27 經濟年度であろう。

（2） 生產水準は復興期の終った時に，大體 1913 年すなわち戰前の水準を示している。したがって復興期がおわり，いわゆる社會主義的工業化（1926—1929 年)が始まる以前の年を基準年次としてとることは，ソヴェート經濟體制が資本主義の遺產を繼承して，それをどの程度に開發・推進したかを示すためには妥當と思われる。

（3） 1918 年に設立された中央統計局 ЦСУ 1921 年に設立された Госплан（國家計畫委員會）がそれぞれその機能を發揮し，統計活動がその本格的活動の軌道に乘り出したのは，いろいろの統計調査の施行の具合より見て，[16] また，統計を基礎資料とする諸經濟計畫の作成狀況より見て，[17] 大體1926—27 年以降のことである。したがって，1926—27 年頃，はじめて，國民經濟の全連邦的規模における，可及的に正確な，把握が可能になった，と考えていい。

1925 年に復興期をおわったソヴェート經濟が，その後，第一次五ケ年計畫（1928—1932年）第二次五ケ年計畫（1933—1937年）を完了するにいたるまで，その中心的課題としたものは，第一に，生產力の增大であった。五ケ年計畫特に第一次第二次五ケ年計畫はある意味において生產力の倍加計畫であった，ともいえるのである。[18] そのためには，ソ連邦が資本主義の遺產を繼承して，どれだけ生產力を高めたかを物量的に確證することが，ソヴェート經濟統計の大きな仕事となってきたのである。ソヴェートの生產統計は，そのために，まず出發點たる資本主義の遺產を 1926—27 年の經濟構造においてとらえるためには，當該年度の諸商品價格を基準とし，それからの發展を物量的に示すためにはこの商品價格を不變價格として一切の各年度價格をこの不變價格に換算したのであって，餘他の諸國がこの樣な場合に採っている統計的處置と何等異なるところがない。[19] その場合の統計的 Bias はいわば necessary evil であって，ソヴェートの經濟發展を作爲的に誇大化しようとするものでないことは，まじめな研究者の等しく認めねばならぬところであると思う。しかも尙，この點に許しがたい《upward bias》があると主張する論者の多くは，生產指數のみがソ連邦經濟力を測定する唯一の尺度であるとして，生產指數の意義を過重評價しているきらいがある。思いすごしはそこから生れる。たとえば，Gerschenkron は《Russian indices of the physical volume of industrial output》こそがソ連邦の「經濟的發展の速度を測定する主たる尺度」であると述べている。[20] が，經濟的發展の測定尺度は，そのほかにも，たとえば，工業・農業・國民所得における社會化部分の增大の指數，また，ソヴェ

15） L.E. Hubbard, op. cit., p. 368.

16） 1918 年の失敗におわった工業調査，1920 年の部分的な人口・農業・工業調査，1923 年の都市における人口および工業調査の經驗を經て，1926 年には始めて全連邦的な國勢調査が成功をおさめ，1927 年には M.H.Смит の指導下に年度別工業センサスが軌道にのり，同時に各工業機關（人民委員部，コンビナート，トラスト等）が所管工業企業の年次報告を作成するしくみができ上っている。小工業調査も 1926 年には不充分ながらもその第一回が施行されている。

17） 1925 年 8 月に始めて 1925—6 經濟年度國民經濟統制數字表が，發表され，爾後ひきつづいて，1926年 8 月に 1926—27 經濟年度統制數字，1927 年 9 月に 1927—28 經濟年度統制數字が發表され，かかる統制數字（年度計畫）を基礎とし，またその作成活動の經驗をとりいれて，五ケ年計畫（展望計畫）案の作成も 1926 年 3 月から始められ，1927年3月に第一次案が發表された。

18） 參照，平館利雄『ソ連經濟の分析』東洋經濟新報社，昭和 22 年 12 月 102 頁。

19） ただその際ソヴェート統計が Paasche's method ではなく，Laspeyres' method を採用している點は，一應問題とされるかもしれない。

$$\text{Laspeyres}: \quad Q=\frac{\Sigma q_0 p_1}{\Sigma q_0 p_0}$$

$$\text{Paasche}: \quad Q=\frac{\Sigma q_1 p_1}{\Sigma q_1 p_0}$$

（但し基準時點 0 の價格および數量を p_0, q_0 とし，比較時點 1 の價格および數量を p_1, q_1 とする。）
Laspeyres' method を用いる場合の方が Paasche's method を用いる場合に比して Q の値が大きくなるのであって，その意味において，後者を捨てて前者をとったことについて，ソヴェート當局者の宣傳化的考慮を云々することは可能である。しかしながら，國際統計學界においてかかる場合，Paasche を捨てて Laspeyres を採ることの方が普通であり Paasche は單に試案としてみられているに過ぎないという現狀からみれば，上の如く斷定することは，妄斷のそしりを免れがたいであろう。

20） A. Gerschenkron, op. cit., p. 217.

ート經濟統計の構造が資本主義諸國の統計の構造と異なる點(前述),等々についても,與えられているのである。

2) **小工業編入の問題** ソヴェート統計が批判される第二の重要點は, 1926—27 年頃には生產統計に算入されていなかった小規模工業乃至私的工業の生產が,その後,漸次,生產統計へ添加されて,そのために,生產統計に《upward bias》が現われた,という點である。これを今かりに小工業編入の問題と名付けよう。小工業編入については二つの事由がある。その一は,小工業および私的企業自體が,或いは,國營トラストに直接編入され,或いは,國營工業の下請部分となったこと,および,第二には,從來の家庭內での仕事が,例えば裁縫,食堂,製靴,農機具修理等が,獨立の產業に轉化し,統計の面に現われ來ったこと,がその理由としてあげられる。

この問題については,二つの點を指摘しなければならぬ。その第一は,われわれの入手し得た限りでの材料にもとづいて判斷すれば,ソヴェート統計がかかる全國的統計としての缺陷を持っていることも,或程度まで容認されるのではなかろうか,ということである。その理由は,ソ連邦における小工業調査は 1926 年におこなわれたのが最初であるが,全連邦的規模において小規模工業を統計的に把握したのは 1929 年をまたねばならなかった。1929 年の小規模工業調査は,この調査範圍において,「調査計算洩の割合は各州において 0.5%乃至10%,全連邦平均では約 2—3 %であった」[21] とされ,「1929 年の小工業調査の結果,1928—9 經濟年度においてはじめて聯邦の全國內工業總生產額に關する一般的總括をなしえたのである。」とされる。[22] したがって,それ以前の全工業生產額が小工業のそれを含まず,それ以後において小工業を含ませ,それと基準年次との比較をすることによって生產力の發展の速度を檢出したとすれば,いわゆる《upward bias》の介入することは當然であろう。ただ,この際第二に言わねばならないことは,ソヴェート連邦において小工業が統計の範圍に入り來ったことは,小工業が社會化され,社會主義經濟の有機的な一部として社會主義經濟體制全體の中へ編入されたことを意味するものであり,そのことは生產力の增大を意味すると見てもいいのではあるまいかという點である。從來の家庭內の勞働が獨立の產業になったことについても,Baran はきわめてシニカルな表現をとってこれを皮肉っている。[23] 家庭內の勞働が國營施設に肩替りされることは,レーニンが,國內戰當時の苦しい時代にも,大衆食堂,托兒所,等々を增設して婦人の家事勞務からの解放を說いた態度と考え合せて,極めて極端に云えば,かかる企業的生產への肩替りこそが,ソヴェート的な考え方をすれば,ソヴェート人民の生活を向上せしめ,ソヴェートの國力を高める指標になるとも言いうるのではあるまいか。どれだけの量の物材がつくられるということとならんで,その物材がいかにつくられるか,いかなる社會的關係の下でつくられるかをも考えねばならない。上の事實の統計面への投影が《upward bias》を生ぜしめるということは認めるとして,かかる《upward bias》の指摘がいかなる意味をもつかは,あらためて考うべきことではあるまいか。

Ⅲ むすび

以上で國外からくだされたソヴェート經濟統計批判の主點たる,ソヴェート統計がソヴェート經濟の發展を過大に見積っているという點について,ソヴェート的な反批判のあり方を豫想的に提示してみた。私見によれば,この點については,批判と反批判とは絕對に融和しないであろう。というのは,ソヴェート連邦においては,數字上のいわゆる「奇蹟」は,人民の國民經濟發展に對する熱意によって必らずおこりうるという考え方[24] と,ソヴェート社會は發展しつつある社會であるから,マルクス主義再生產理論よりすれば,擴大再生產の過程以外の過程を辿りえない,という考え方[25] とが,あらゆる經濟活動の豫測,實績評價に當って常にもち出される公理である。問題は,多くの,外國經濟學者達が,この公理を,何らかの形において認めていない點にある。そこに同一の現實に對する樣々の評價が生じ得る根據があるように考えるのは極端な考え方であろうか。——私は,統計の分野においても,二つの體制の問題は,ぬきがたい宿緣的問題であることを,この際しみじみと思わざるを得ないのである。

(野々村一雄)

---

21) 內閣統計局『ソヴェート聯邦に於ける統計組織』昭和 14 年 11 月 83 頁

22) 前揭箇所.

23) Baran の敍述をそのままひいておく。——《At the same time, a number of production activities previously conducted by self-suppliers were taken over to some extent by industrial enterprises (cooking, tailoring, shoemaking, repair of agricultural machinery, etc.) This is the reverse of the classical case of a gentleman marrying his cook, and leads to the reverse result of increasing reported output. (Baran, op. cit. p. 232)

24) См. Сталин, 《Вопросы Ленинизма》, изд. 11-ое, Москва 1945 г. стр. 349.

25) См. Сталин, там же, стр. 277.